

---

# 魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

Vergil

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 運に見放された転生者

### 【Nコード】

N3482Z

### 【作者名】

Vergil

### 【あらすじ】

まあ、死んで転生した。何処でもあるような話だ。

だがな、あんな死に方あるのか。神はどれだけ俺が嫌いなんだ！！

折角。折角出来たのに……色々と運に見放された不幸な転生者の物語です。

## プロローグ（前書き）

コメディ、ギャグに初挑戦です。

こういう笑系統のを書いてみたくなりまして。やってしまいました。

デビルメイクライは、技などで出てきます。主に主人公の。

## プロローグ

俺は棗涼介。うん問題無い。

年齢は18歳であつてる。

性別は男……うん問題なし。

此処までは良い、此処までは……

次はとても重要、俺は死んで違う世界に転生した転生者らしい(?)  
しかも赤ちゃんからだ。

なんでや、なんでこんな事になつたんだ。好きな女の子に告白して  
彼女も出来て、リア充の生活を送り始めて、なんで！　なんでや。

なんでリア充になつて15分後に死ななあかん俺は、世の中は  
そんなにリア充が嫌いなのか？　そうなんだろう。

だからリア充になつて、幸せ絶頂期の俺を死に陥れたんだろう。そ  
うなんだよな。

ならなんで俺だけを死なせた。他にもリア充の奴らは居るだろう？  
なんで俺なんだよ。

折角彼女が出来てリア充になれたのに、リア充を満喫しなかったの  
に、なんでや。初リア充になつて15分後に死ぬって、もうギャグ  
やん。ギャグ以外の何者でもないやん。

何で爆発して死ななあかんねん。リアル、リア充爆発じゃないか！！

転生した直後は相当荒れた記憶がある。

しかー！ー！ー！ー！ー！！！！！！ 此処が魔法少女リリカルなのはの世界と知って、テンションハイ！！！！！！

なんだが、その事実を知ったのは俺が小学四年生の頃。丁度4年生の頃に海鳴市つて所に引越してきたんだ。

その名前を聞いて此処が魔法少女リリカルなのはの世界つて知ったんだ。その時クラスは違ったが、他のクラスになのは達がいるのを発見したんだが、不思議な事にアリシアだと思われる人物が居た。

更に見たことの無いツンツンヘアの黒髪でそこそこ格好いい男の子も混ざって居た。背はなのは達より頭一つ分位高いかな、まあ俺ほどじゃないけど。

そんな事よりも俺は目が点になった。それと同時に、この時点でP・T事件も終わっていて、闇の書事件も終わっている事を物語っていた。しかも二つともハッピーエンドで終わった可能性がある。

あの男の子は原作には居なかった。多分俺というイレギュラーが現れたことにより起こった小さな歪みかもしれないし転生者という可能性も捨てきれないがもうどうでもよかった。

当然の事だがこの時点でやる気が失せた。人生に落胆した。

だけど、神は俺を見捨てて居なかった。

俺が小学五年生の時、デバイスを手に入れた。普通なら手に入れた瞬間テンションがhighになるんだが、なれなかった。

だって、山奥の洞窟だ。しかも、此処まで来るのに死ぬような思いもした。更に目の前には見たことのある女の子が俺にデバイスを手渡した。

こうしてしまった経緯が、家族でピクニックに行く。山の探検に出て。遭難。

不幸だあああああああああああああ！！と全力で叫ぼうかと思つた時に、目の前から大きな毛むくじやらの動物が現れた。

全長は3m位で四足歩行で、全身が茶色の毛で覆われている。

手足には鋭い爪。あれで引つ搔かれたら即死間違いなし。

鋭い牙に強靱な顎。あの顎に噛まれたら俺の二度目の人生終了を告げましたになる。

此処まで言えばなんとなく想像は着くと思うが、クマだ。しかもクマの視線が俺を捉えて動こうとしない。とても怖い、小便漏らしそう。脱糞しそうだよう。

いくら精神年齢が20を超えていても小学五年生の肉体でクマに勝てない。転生する前でも勝てる要素は……無し、一個もないよおおおおお！！

俺とクマまでの距離は大体5m弱しかない。

さあどうする俺？ まさにdead or alive．俺が思案している間にもクマが近づいてくる。

さあどうする俺？！ 回れ右してダッシュか？ それとも死んだふりか？ どっちが良いんだ！！

選択の時だ。どっちがバッドエンドルートなんだ？ 逃げるか、死んだふりか。どっちが良いんだ。

それとも戦闘……そのルート死亡フラグが半端じゃないんですけど。ダメだな。

もうヤバイ。こうなったら……

……死んだふり。君に決めた！！

俺はその場で倒れて死んだフリをした。さあ、クマよ俺をスルーしろ。

これで万事解決だと良かったんだが、首元の襟をクマが噛んで俺を持ち上げた。その瞬間、俺は恐怖のあまり失禁して気絶した。カツ

コよく言えばブラックアウトと言える。

しかし、直ぐに意識を取り戻した。側頭部に何か固いものがぶつかった様な痛みでだ。それは運ばれている最中に俺の後頭部が木にぶつかった。その痛みで意識が覚醒した。

ああ、俺の二度目の人生にも終止符が打たれたな、せめて原作キャラとは一度で良いから話をしてみたかったな。悲哀感を全身から放出しながらクマに連れ去られていった俺。

そして、洞窟の奥深くに連れていかれたその瞬間、俺は驚愕した。

だって俺の目の前に女の子が居た。しかも見たことがある……高町なのは？ 違う。目の色が違う。

するとクマがその女の子の目の前に俺を下ろすと、何処かに消えていった。

彼女はマテリアルズの一人。星光の殲滅者。シユテル・ザ・デストラクターということとはリインフォースが生きている可能性は高いな。

そんな事を一瞬のうちに考えていると、彼女が手を差し伸べてくる。その手には、日本刀の形を型取った白銀のネックレスがあつた。

俺はそれを手を伸ばして受け取った。彼女は優しい微笑みを見せた。心臓が高鳴る。ドクンドクンという音がハッキリ聞こえる。心拍数もハネ上がり、顔が赤くなっているのが手に取るように分かる。



相手にこの心臓の音が聞こえてないか凄く心配だ。聞こえてたら滅茶苦茶恥ずかしいぞ。

俺は顔をそむけて、彼女に真つ赤になった顔が見られないようにした。丁度その視線の先に彼女の足元が見えた。しかも、ふらついていた。

危ない、俺はそう叫んだ時には体が動いて彼女の体を俺の体で受け止めていた。まだ発育途中のお胸さんが俺の胸板にむにゅうってなつた…… oh yes!!!!!!

だが直ぐ彼女の異変に気が付いた。息が荒く、呼吸が激しい。おでこに手を当ててみると熱いし、しかも頬が赤く火照っている……

これってもしかして……

……発情期!? マジで、ヤバイじゃん。今から俺に襲えと言いたいのか? 上等!! 襲いまくってやるぜって何を言っているんだ俺は。そんなわけねえじゃん。

俺は彼女をおんぶして、洞窟から抜け出した。俺今、現在進行形で絶賛遭難中、早く父さんと母さんを見つけないと。この子の為でもあるけど、一番は俺の為に。

遭難中の俺は何とか父さんと母さんを見つけて、この子を発見した事情を話した。(クマとの死闘？ は口にしなかった。) 親が居ないことやその他もろもろ。するとさ、俺の予想通り……家の子になった。養子に取ったんだけどね。

ああ、俺の平穩の日々が崩れたかもしれないな。

何でこうなった。

それから約一週間が経ったある日、俺は家でつまらんTV番組を見ていた。

ガシャン！ という物音が二階から聞こえた。

「おいおい、マジかよ。こんな時間帯から幽霊が出たとかいうなよ、俺チキンだから幽霊とか全くダメなんだよな。ああ、幽霊とかマジで勘弁してくれよ。小便漏らしそうだよ。」

メツチャ棒読み。

「ああ、怖いよ。ちびるよ。」

棒読み。

「父さん。母さん。早く帰ってきてよ。」

ガチャンつとりビングの扉が開く音が聞こえた。首を後ろに回して見ると……美少女だと？ 美少女の幽霊だと。キャッホーウー！

美！ 少！ 女！ イエーイ

御ふざけは此処までにしておこつ。

「もう、大丈夫なのか？」

「お陰様で、大丈夫です。」

凜とした透き通るような綺麗な声。

「そうか、それは良かった。」

「……………」

「……………」

会話が續かん。ちよいつとばかり気まずい空気だな。

きゅるるる……っという可愛い音が聞こえた。しかも、彼女の方からだ。

もう一度後ろを振り向くと、全身をプルプル震わせていて、耳まで真っ赤になった顔を下に向けていて、両手でお腹を押さえていた。

正直に言おう。メツチャクチャ可愛い。お兄さんの心臓鷲掴みにされちゃったよ。

まるで、小動物を見ているような感覚だ。撫でたい、愛でたい、ペロペロしたい、お持ち帰りいいいい！！！！！！

ハッ！！ 危ない危ない、もう少しで理性が崩壊するところだった。何とか踏みとどまった

俺完全にスリーアウトチェンジイ！！

ヤバシ、このままだと。変態という名の紳士から変態という名の変態に成り下がってしまう。なんとか戦況を打破しなくては……気のせいかな？ あの子から熱烈な視線を感じるのだが？ 視線を向けてみた。

顔を両手で覆っている。うん大丈夫

「なわけあるかあああ！！！」

ビクツと体を震わせたのが伝わってくるが、関係ねえ。ガン見じゃん、メツチャガン見じゃん。両手で覆っているのに関わらず、大きな隙間があるじゃん。指と指の間の隙間空きすぎじゃんか！！ 意味ねえじゃんかよおお。

するとまた、きゅるるるる〜っという音が聞こえた。

「ハハハハハハハ！！！」

俺はもう腹を抱えて爆笑するしかない。ああもう可愛い。

必死にお腹の虫の音を隠そうと顔を左右に震わせる。何この可愛い生き物は？　ぐへへへお兄ちゃんが美味しく食べてあげまぢゅよ。台所に行き、包丁を取り出した。

「何が食べたい。」

包丁を片手に包丁に聞いてみる。

「……………」

返事が無い。只の包丁のようだ。

変な空気が流れる。Ohッツコミ無か、そうかそうか。なら、ッツコミをしてくれるまで俺はボケるぞ。それでも良いのか、美少女。

「な、なんでやねん？」

疑問文＋可愛く首を傾げる「グハッ!!」。

「グハ!!」

口から大量の血を吐き出して倒れるイケメン。駆け足で俺の傍まで来てくれる美少女、最後の俺を看取ってくれるのか。それはありがたい。

左手で俺の後頭部に手を差し入れて、頭を起こしてくれる。

目には涙を溜めている。そうか、こんな俺が死ぬことを悲しんでくれるのか。

「……」

何を言ってるんだ。

「はよ、飯作れ。」

ハッキリと聞こえた。

「死にかけの俺にそれは無いっしょ。」

我が生涯に一片の悔い無し。ガクッ。

それから、数年後。俺は中二になった。  
これで、いくら厨二発言しても大丈夫イ!!!  
一応俺はなのは達  
が通う中学と一緒だ。しかし、あの美少女は違う中学に通って  
もらうことになった。

その時に猛反発を喰らったが、高校は一緒の所を通うという事で決着はついた。

後は此奴の学力なんだが、ハッキリ言おうか。学校行く必要なくね！　それが俺の回答だ。

頭良過ぎ、適当に中学レベルの問題（まだ、俺が四年生の頃）出してみたんだが、全問正解。試しに高校レベルの問題も出したが、殆ど全問正解。

そのままの勢いで大学の問題集を買って、試したところ7割以上はあつた。モーマンタイ。

そして、名前の方だが、父さんと母さんが斬新すぎる名前を出すせいで三日三晩もかかってしまった。

父さんは、来栖星（星と書いてスターと読むらしい。）どこぞの「はがない」に出てくるペガサスさんとツツコミたくなつたが、我慢我慢。

母さん、これは流石にツツコまずには居れなかつたよ、来栖流星と書いて（スターダストと読むらしい。）アウトオオオオオオ！！  
それ完全にアウトオオオオオ！！

それで、俺の出した案で妥協してくれた。いや、マジで良かった。

来栖<sup>くるすせい</sup>星香と読む。正直に言って、これが一番妥当でしょう。上二つは父さんと母さんが出した案でも比較的にマシな方だ。あれでも。

あ、俺？　今の俺の名前はメツチャ斬新すぎる

父さん母さん、この恨み死んでも許さないからな。

来栖一馬。何となく予想は付くと思うけど、これ「かずま」って読  
むんじゃないかって……「ユニコーン」って読んだ。

穴があるなら穴に入りたい。いつそ殺してくれ。



## ブローグ（後書き）

ギャグ、コメディを書く上でこうした方が良いというのがありましたら、ご教授お願いします。

ギャグ、コメディ系統は不得手ですので、よろしくお願いします。

## 第二話 クラス（前書き）

基本的に一話一話短いです。

## 第二話 クラス

新学期。

学校に着いてすぐに掲示板にダッシュ。今日から中学二年生、新クラスの仲間たちを拝見しにいかねばならない。

ある意味、学校の中で一位。二位を争うイベントだ。

まあ、拝見って言っても組を確認するだけだ。何故って？ そりゃ学校でも居眠りor保健室でサボッテばかりの常習犯の俺にはクラスに誰が居ようと関係ない。

誰にも俺のジャステイスに触れることは出来ない。

という事で、新しいクラスに行きますか  
主に寝る為  
に……

その時、彼はシツカリと確認していないのが仇となった。

なぜなら、そのクラスには。

高町なのは。

フェイトⅡ テスタロッサ。

アリシアⅡ テスタロッサ。

八神はやて。

アリサーバニングス。

月村すずか。

の名前があることに、気づいていなかった。彼がある意味一番絡みたくて、絡みたくない者の名前が全員揃っていることに……。

何時もの俺なら、なのは達+イレギュラーのクラスを確認していた筈なのに、今となって悔やまれる。確認しなかった事に。マジでミスったわマジで。

イレギュラーの存在。

風間恭仁、彼の名前もあった。

俺のクラスは1組。これで、8年連続1クラスだ。

「俺の席は……あそこか。」

早速カバンを枕代わりにして、

「お休み。」

寝た。その速さにのび太もビックリ。正にのび太に匹敵するほどの速度であった。

一度だけ、なのは達の内、なのはとバーニングとはやてと一緒にな

った事がある。それは去年の話だ。  
なのはとバーニングがメツチャ絡んでウザ可愛かった。くぎゅうく  
の声はツボに入る、ゆかり姫の声も良い。

いつつも居眠りしてくる俺に、なのはとバーニングが突っかかつて  
くる。なのはの命令には直ぐに従います。なぜか？ 怖いからだ。  
去年、なのはを無視し続けたら何処からかクナイが飛んできて俺の  
額に刺さった。その次の瞬間に、強烈な殺気が俺だけに放たれた。

あんな殺気を浴びたのは初めてだ。死を覚悟したよ、「俺のなのは  
に迷惑をかけるな！！！！」っていうシスコンバリバリの思念が  
ハッキリ聞こえたからな。おお、怖い怖い。

バーニングとは、何時も喧嘩だな。

何時殴り合いに発展してもおかしくなかった。なりそうな所で、隣  
のクラスからバーニングの嫁(?)が飛んできて、止めに入ってく  
れた。

まあ、なんでバーニングが俺に突っかかる理由は分かっているけど、  
テストでも負けるのは嫌なんだな。こんなんでも、一応俺は全教科  
毎回満点で、校内一位で常に二位にバーニングが居る状況だからな。  
hahahahahaha.

はやてとは、話が合うから、彼奴となら同じクラスでも良いかな。

何の話って、そりゃあはやてと言えば……おっぱいしか無いっしょ。  
はやてこそおっぱいの聖書だ。

あやつ、此処に通う女子全員のバスのサイズを網羅してやがった。  
さいっこうにcrazyだ。

今年ぐらいは最高の中学校生活が送れますように……。

その願いも儚く散っていた。しかも、魔導師組揃っているという最悪のクラスで……。

さあ、今日の帰りに翠屋に寄って帰るか。

HRが終わる。10分間の休憩時間。

誰かが俺を揺すっている……誰だ？ ……なんでなのはが居る？？？？ それより、早く起きなければ殺されてしまう。うん？ 他にも沢山の気配を感じるぞ。

目を開けて周りを見渡すと。

Oh!!！ なのは達勢ぞろいで俺の席に集まっていやがる。何て嫌がらせだ!!！

good-bye俺の中学二年生生活。

「何、俺の中学二年生生活が終わりを告げたっていう顔してるのよ。」

凄いな、俺の心を読むなんて。

「今、私の事。バカにしたでしょう？」

「ソナナコトアリマセンヨ。バーニング。」

「だから、バニングス！！ いい加減名前ぐらい覚えなさいよ。」

「無理だ。」

「何で、即答なのよ！！」

プンプンッと怒りを露わにしている。カルシウムとね、または牛乳飲めよ。

「まあまあ、アリサちゃん。落ち着いてよ。」

そこで、バニングの嫁（俺が勝手に決めつけている）がバニングを宥めている。そのお陰か少しは興奮が落ち着いたようだ……流石、嫁（？）

「だから、私はアリサちゃんの嫁じゃないってば。」

スマンスマン、知らぬ間に俺の思考が漏れていたようだ。

「一馬君ヒコーンのせいで、私に同性愛者っていう噂が流れてるんだからね。」

「頼むから、その名前で呼ばないでくれ。一馬ヒコーンだなんて、我が生涯の恥だ。」

バニングが嫌な笑みを浮かべやがった。

「ねえ、一馬ヒコーン。」





「私たちの入る隙が無いね。」

「にゃははは。」

苦笑いをするのは。

「はやて、この三人っていつもこうなの？」

「そつやで、アリシアちゃん。」

「一馬ヒコマって面白いね。」

一馬ヒコマには、効果は抜群だ。

「くっそ、誰だか知らねえが。俺のなのは達と仲良くしやがって、  
クロス。」

風間恭仁が、一馬ヒコマの方を見ながらドスグロイオーラを放ちながらブ  
ッブツとつぶやいていた。

## 第二話 クラス（後書き）

こんな感じで、ほのぼのと行きます。

戦闘は極力少なめで行きます。

来栖星香の登場を楽しみにしている方々、もう少しお待ちください。

### 第三話 自己紹介（前書き）

更新です。

当然の事ですが、短いです。

### 第三話 自己紹介

休憩時間も次の授業が始まった。

まだ、新しいクラスになったばかりだから、授業といった授業はない。一人一人自己紹介をするようだ。

あゝダリィ。眠くても、隣になのはという存在が居る為に眠れない。

どうしてこうなるの……

「それじゃあ、自己紹介をする上で、自分の名前と趣味・特技。そして、将来の夢を語ってもらいましょうか。」

教壇に立っている黒髪の美人先生が言っている。概婚者である。

うへえ〜嫌だな。面倒臭いから寝る……出来るわけねえよ。だって、隣になのはだけ。絶対にシスコン王の攻撃と殺気が飛んでくるって、最悪だ。

珍しく俺は起きている。

着々と自己紹介が進んでいく。先に言っておくが、何でか知らんがこのクラスだけ席順が好きなようにして良いらしい。

まあ、俺が一番左端の一番後ろだ。良い感じに太陽の日が当たって最高の居眠り場所なのに、隣になのは。前にバーニング、右斜め前にすずか。



さて、俺はなのは達の表情を確認してみるとしよう。どんな表情をしているか楽しみだ。

まずは隣の魔王様なのは。

うっわ〜汚物・糞を見るような視線で見てるよ。

フェイトは……視線で人を殺せそうなんですが?! 恐いですね。

アリシアは、エチケツト袋!!!!!! オブロロロロロっていう音を出しながら吐いてるうううう。

はやてとバーニング、すずかのよく表情後ろ姿で分る。絶対に負の感情で見てるよ、彼奴嫌われるのか? まあ、俺には関係ないか。

「将来の夢は、まあこの俺のイケメンフェイスを生かして色々なことをやりたいな。例えば世界一イケメンなアクションスターになっても良いし、この美声を生かして歌手でも良いや。」

ナルシ発言が嵐の様に炸裂しやがった。誰か止めに入れ、そして女子!!! なに目ん玉キラキラ星させてやがる。

だれか、止めるよ。なのは達も耳を塞いでゲッソリしてるぞ。アリシアなんてまた吐いてるぞ……計十回ほど。

……10分後、やっと終わりを告げた。

はい決定。俺の中でコイツは相当ウザい奴だと認定されました。はい拍手、ぱちぱちぱちぱち〜

脳内で俺の分身たちがスタンディングオベーション。

初めてだ、お互いに一言も話を交わさずに俺がウザい奴に認定するなんて、奴相当やるようだな。

その後、彼奴は俺に対して強烈な殺気を向けてきやがった。俺が何をした、只滅茶苦茶ウザい野郎に認定しただけだろうになんてそんな事で、殺気を向けられなきゃならんのだ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいき。

アリシア「テストロツサの順番になった。露骨に風間を遠回りするように、一旦俺の列まで来て教卓の前に出た。」

「アリシアちゃん、恥ずかしがらずに俺の傍を通ればいいのに。」

あんなセリフを言う奴がマジで存在したんだな。今の言葉を聞いたアリシアが、無表情になった。今の言葉はキツイな、男の俺でも吐きたくなっただわ。マジで。

「アリシア「テストロツサです。私はあそこに座っているフェイトの双子に姉です!」」

うん、元気一杯の子はお兄さん大好きですよ。

「え〜つとね。趣味・特技はね。運動する事と運動!」

君はアホな子決定ね。

「将来の夢はね、まだ決まっていけないけど。楽しく過ごせたらそれでいい。」

その意見には俺も賛成だ。君はアホな子だけど、話が合いそうだな。

君はアホ犬で決定だ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいきフェイトの番になった。

さて、なのはの嫁(?)はどのような自己紹介をしてくれるのか？

思えばさ、結構楽しんで無いか俺？ 気のせいかな。

こやつも、アホ犬と同じように風間恭仁の事を遠まわしに浮かしながら教卓の前に立つ。そして、また彼奴がウザったいキザなセリフを言っていたが、彼奴の言葉に一々耳を傾けていたらバカになる。

「フェイト!! テスタロッサです。」

うん、落ち着いた物腰。流石執務官。

「趣味・特技は……家事(火事)です。後は、走るのが速いです。」

うん？

「よろしくお願いします。」

家事が火事って聞こえたのは俺の気のせいかな、気のせいだよな。そっつだよな、俺の気のせいに決まっている。



「あつ?! 夢はまだ決まってるませんが、強くなりたいです。」

こうして、フェイトの自己紹介も終わった。強くなりたい? 夫( ? )のなのは負かせる位にか? そりゃあ無理だろう。彼奴は魔王だからなhahaha!!!!!!! 何か隣からおつそろしい視線を感じるのですが……

(後でオ・シ・オ・キ・ね)

お口がそのように動いてました。shit・ミスったか、俺の思考が読まれるなんて。しかもあのなのはに読まれるなんて、屈辱だ。

だが実際なのはは、「後でお話ししようね」「っという感じで、親しみをもった感情を込めていたのだが一馬ニコッのなのはに對する先入観の為か、そういう風に感じていた。

そいで、またモブキャラの自己紹介が進み。月村すずかの番に回った。

「お!!! 愛しのマイエンジェル!!!」

すいませ〜ん。誰か彼を精神科に連れて行ってください。脳が腐ってますよ、日本の汚点が此処に存在しています。誰か彼を暗殺してください。それが世界平和につながる第一歩ですよ、誰か彼を抹消してください。

「あの、先生。」

「何でしょうか? 月村さん。」

「具合が悪いので、保健室に行きます。」

「そうですね。顔が真っ青ですし、直ぐに行ってください。」

「はい、先生。ありがとうございます。」

真っ青って言うかさ、死人みたいな顔色になってますけど？ ドンマイ。

まあ、彼奴が絡まないわけないよな。

髪を掻き上げながら颯爽とすすかのもとに行く。正直に言ってバリキモス。

人間として終わってやがる。

うわぁ〜露骨に嫌な顔してるよ。流石に可愛そうだから助け舟出してやるか。

「先生。」

「どうしましたか？」<sup>「ヒューン」</sup>「馬君。」

「ゴパ！……！」

と・け・つ……！ だが、之で。

「先生、吐血したので保健室行っていいですか？」

「吐血したんですか？」

「はい。」

よし、これで保健室に

「ダメです。」

「はい?」

「先生、今なんて言いました?」

「あら、一馬君は耳が悪いのでしょうか?」

「グハ!!!!!!!!!!」

だから、その名前で呼ばないでくれ。と、吐血が。

「そんな、リアルな芝居しなくていいですよ?」

「いや、先生。これはし」

「しなくていいですよ。」

「いや、だから先生」

「しなくていいですよ。」

「い」

「黙れ、豚野郎!!!!!!!!!!」

「はい。」

何このクラス。冥王様がいらっしやるよ、談笑していた生徒が一斉に黙り込んだよ。普通さ生徒に向けて豚野郎は無いんじゃない？  
せめてウンコクズでしょう。

こんな感じでグダグダで、時間が過ぎていき。俺まで回らずに自己紹介は終わった。

ああ、俺の名前が知れ渡ってしまった。一馬ヒツマは辛いよ。

「あれ、うちノ私の自己紹介は？」

時間が足りず回らなかった。

第三話 自己紹介（後書き）

ウザいですね〜風間恭仁

第四話 mission? 捕まるな

(前書き)

更新。

一馬が<sup>コミュニケーション</sup>変態になった。

## 第四話 mission? 捕まるな

今日という一日の退屈な学校が終わった。

カバンを持って帰ろうと立ち上がった時。肩をがってされました。

怖いので少しずつ顔を後ろに持って行きました。

「あの〱魔王様<sup>まおう</sup>。私のような下郎に何かご用でしょうか？」

「まあ〱なんで自分を卑下するような言い方するの？」

それはね、あなた様が怖いからであります。最近、自分のキャラが分らなくなってきました。

「何で、勝手に帰ろうとするの。お話ししようって約束したのに。」

「What? I do not know」

「何でそんな事言うの?」

「Why, I ask that obvious?」

「それは。」

「それは?」

「なのはが『可愛いからだ』!?!?!?!?!?」

誰だ?! 何てこと言いやがる。後ろを振り向くと犯人が俺の後ろでしゃがんでしてやったりって顔をしてやがった。

なのはは、顔を真っ赤にしているがそんな事を気にしている俺ではない。

「おいはやて。どういつつもりだ? アアアン!」

「にっしっし。」

何、悪巧み成功したっていう顔をしてんだよ。この後に俺に降りかかってくる不幸を知っているのか!

「一馬<sup>ニコニコ</sup>。どうしてなのはには、可愛<sup>ニコニコ</sup>いって言うのに。私の場合はバーニング<sup>ニコニコ</sup>って言うのかしらね。一馬<sup>ニコニコ</sup>?」

ほらね、来たでしょ。不幸の権化が

どっかに

糖分王国への入り口が……

吐血している暇なんかねえええ!! 怖いよ。炎王が俺の両肩をガッてしてきたよ。

「どうしてかしれねえ?」

「ハハハハハ。どうしてだろうな?」

「アハハハハハ。」

バーニングの滅茶苦茶怖い笑い声に、話をしていたクラスメイトが一斉に静まり返って顔を青くしている。ナイスコンビネーションな



のか？

そして俺とバーニングは最恐のバンドを組んだ。Bad comm  
unication。(後のB、Z)

「ハハハハハハ。」

頬を引き攣らせた逃れられない苦笑い。

「アハハハハハハ。」

二人の笑がとうとう合わさる時、一馬ユニオンの逃走劇が始まる。

回れ右からの、

「Bダツシュ!!!」

「逃がすかああああ!!!」

物凄い形相でバーニングが追いかけてくる。赤鬼も青鬼も尻尾を巻いて逃げる勢いだ。

「はやてええええええええええ!!! てんめええええええ!!! 明日覚悟しとけえええええええええ!!!」

「ほんじゃ、頑張つてな。」

メツチャ他人事何ですがねはやてさん。明日ハヤテ、オモチカエリ、タベル。マジで覚悟しとけよ。

「ほわちやあああ！！」

「うわっ！！」

マーシャルアーツキックしてきやがった。ちょっと掠ったぞ。どんだけ武術レベルが高いんだ、バーニングは。

捕まったら殺されるな俺。ガチのリアル鬼ごっこやん。

一応バーニングを巻くことは出来たが、易々と学校を出ることは出来ないだろうな。アイツの勘は恐ろしいほどに当たるからな。それに搜索レベルも高いし、さて何処に隠れようか？ 今隠れているところも何時かは絶対にはれるが、検討はなかなかつかないだろうな。凄く意外なところだからな。

現在、俺が隠れているところは、四階の女子トイレの一番奥の個室だ。何か新年度早々やらかした気がするが、気にしたら負けなんだろう。

普通なら女子禁制の男子トイレに隠れるんだが、彼奴の事だ。直ぐにバレる。ならその裏をかいって男子禁制の女子トイレに身を潜める。これこそかくれんぼの鉄則。

女子更衣室でもOKだ。

さて、それはそうとどうやって出ようか？ 今この女子トイレに女子が集団で入ってきて出るに出れない状況にある。しかも、彼女ら

は先輩だ。

此処で出たら変態という名のレッテルが張られてしまい、学校全土に知れ渡ってしまう。ましてや、家族にも知られてしまう。それだけは避けなければならない。

特に星香にばれたら、search&deathという状況になってしまう。まさしくdead or deathだ。

此処から脱出する為の選択肢は一応何種類がある。

一つ、変態という名のレッテルを張られる覚悟で出る。

一つ、全員居なくなるまで耐えきる。

一つ、女装をして逃げる。これはダメだな、男としての大切な何かが失ってしまいそうだ。それが、何かに目覚めてしまつかもしれん。

いや、もう一つある。それは

パンツを被っ

て顔を隠す……そうだ、これが一番良い。これなら顔をばれなくて済む。よし、思い立ったが吉日だ。

しかし、誰のパンツを被ろうか。流石に自分のパンツを被るのは辛いな。出来れば女子のパンツがあれば一番良いんだけどな。そんな都合の良い話あるわけないか。

自分のカバンのチャックを開けて探ってみた。

結果 マジでパンツとブラジャーが入ってた。色はピンクで、Tバック。ブラジャーも色はピンクで生地が薄い。もう言わんでも分る、これは星香のパンツとブラジャーだ。何で入ってるんだ？ 俺は入れた記憶はないハズ 多分。

記憶を探ってみようか。

今日の朝

「ユー君。起きてください。朝ですよ。」

星香が何時もの日課。俺の部屋に来て俺を起こすという至福のタイム。  
星香は俺の事を「ユー君」って呼んでくれる。「一馬<sup>ヒツマ</sup>って呼ばれるよ  
リマシだが、「ユー君」もキツイ。

なぜか？ そりゃあ、「ユー」の後に「ノ」をつけたら淫獣の名前になってしまからだ。それでも一馬<sup>ヒツマ</sup>って呼ばれるよりマシだ。

「むにゅあゝ後、五分。」

寝返りをうつ俺。当然だが狸寝入りをしている。

「分りました。」

あれ、なんか聞き分けが良いな？ どうしてだ。

殺気！！！！！！

俺は転がるようにして、ベッドから逃げて直ぐにドスッ！ ていう音が聞こえた。確認して見るとね、俺の頭のある位置に国語辞典と漢字辞典の二つの角が突き刺さっていたよ。枕には大穴が空いた。

凄いな。国語辞典と漢字辞典の角って枕にも穴を空けることが出来るんだ……………

「あの〜どうやって、辞書の角が枕を突き破っているのですか？  
星香さん。」

「どうしてでしょうかね？」

笑っているが目が全く笑っていない。恐いです。只、逆らってはいけないと本能が告げている。

「あの〜どうして、広辞苑なんて凶器を掲げているのでしょうか？」

「簡単ですよ。」

「教えてくれるとありがたいのですが。」

「ユー君を、殺して私だけの者にする為です。」

ヤンデレ化していた。誰か助けて、俺に安息の地を与えてくれ。

それからの記憶が無いんだな実際。気が付いたら制服姿に着替えていて、カバンも準備されていて、リビングのテーブルに座らされていたな。何事も無かったように朝食を食べて、学校に来たな。

星香。俺の記憶が無い時にカバンに入れやがったな。

さて、今の俺の状況を整理してみようか。

先輩方の女子トイレの一番奥の個室に入っている。

片手に女子のパンツとブラジャー片手で皺がつくほどしっかりと握りしめている。

それを被って此処から逃走しようと考えている。

変態という名の変態だな。だが、決して俺は変態ではない。紳士だ。

だが、この状況を誰かに見られたら社会的に終わるね俺。

下手すりゃ警察にお世話になっちゃうぜ……ヤバイ。色々と前言撤回、女子トイレに籠城しようそれが一番良い。

それから、1時間後。やっとの思いで学校から出ることが出来た。

運良くあの後、直ぐに女子たちがトイレを出た。その隙に誰にもバ  
れることなく俺も脱出して、一応学校全域を回った。

バーニングは諦めて帰ったと分かった。

今は校門を出て直ぐの所に俺は居る。正座の状態で……

何で正座をさせられているのか？ 簡単だ、バーニングが校門でS  
Pに見張ってもらっていた。俺が学校を出たのを確認してSPが直  
ぐにバーニングに報告。

その次にSPに捕まった直後にバーニングが来る。

そういった流れで、俺は捕まった。両手に超合金で出来た手錠を  
されていて、バーニング様の片手には最高10万ボルトまで出力が  
出せれるスタンガンを持っている。

スタンガンがさっきからバチバチ鳴っているのですが？ なんてバ  
ーニングはそれを俺に近づけているのですか？ そんなのされたら  
俺死ぬよ……多分。

「さて、どんな処刑が良いかしらね。」

「10万ボルトの刑。目に10万ボルトの刑。それとも全部？」

「それ、死ぬうううううう！！ 俺死んじやうよ！！」

嫌だ。俺はまだ死にたくないよ、まだヴィヴィオのパンツクンカクンカしてないのに死にたくないよ、食べても無いよ。

「ハッ！！！！！！」

「汚物は死んだ方が良いでしょうね。」

「嫌だ、止めて、死にたくない。」

「だいじょうぶ。死なない程度で止めるから。」

「それって、死ぬ一歩手前までやるって意味で良いのですか？」

「あら、良く分ったわね。」

目が全く笑っていないですよバーニング様。

「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

そこからの記憶が全くない俺は、気が付いたら夜になってた。



第四話 mission? 捕まるな

(後書き)

一馬は、<sup>エニール</sup>運に見放されていますね。

第五話 一馬(ユニコーン)の休日その1(前書き)

今回も星香が出るんですが、書いてて星香に萌えました。可愛い。

## 第五話 一馬（ユニコーン）の休日その1

新年度始まったの初めての土曜日であり、休日。

休日になるまでの学校生活で、俺はずっと保健室でサボっていた。でないと、居眠りが出来ない。俺の隣に冥王様がいらっしゃる。

もし、寝ていたらなのはが俺を起こすのに時間がかかり迷惑になってしまう。そこは良いのだが、クナイが飛んできて俺の額にぶつ刺さるんだ。その後に「俺の妹に迷惑をかけるな」っていう思念と人を殺せそうな殺気が飛んでくるんだ。

それにより、痛いつていうか傷口がヒンヤリして起きてしまうんだ。

……何時か小太刀が飛んできて、殺されそうなんですけどね……全く笑い事じゃない。

保健室でサボっていてもバーニングがやってきて、マンマミアになっってしまう。

……最近学校で居眠りが出来ない。なえる。

この世にバーニングと冥王様が居る限り、俺に安息の地は無い。断言してもいい。

やっとの事で学校という鳥籠を脱出して、念願の休日イエーイ。

今回こそゆっくり寝るぞ！！ その思いも簡単に砕け散っていた。

前日の夕食時。

「一馬。」

母さんが俺の名前を呼んだ。

そういえば母さんの名前を紹介をしていなかったな。

来栖美麗くわしみづって言うんだ。今年で三十後半に入るんだが、顔が結構な童顔な為か二十代前半って言われてもなんら遜色ない母さんだが、頭のネジが何本か吹っ飛んでいる。

実際、遠い親戚送られてきたタワシをウニと勘違いをして、食卓にウニ（タワシ）の姿煮という素晴らしい料理を作ってくれた。

だから、料理は何時も俺が作っている。そこで何時も星香が手伝ってくれているから、助かっている。

それを父さん。来栖麗くわすれい司は、食べたんだ。タワシを泣きながら、口から血を流しながら食べていた。その時の父さんを見て悪鬼羅刹という言葉が一番最初に浮かんでしまった。それほどの形相で食べていたんだ。

父さんは、バリバリビジネスマンだ。会社の方でも凄く重宝される人材らしい。

「明日から、麗司さんと一か月以上の海外旅行に行ってきますね。」

「うん、わかった……はいいいいいい！！！！」

今、なんて言ったんだ。俺の聞き間違いじゃ無ければ、「明日からお父さんと一緒に一か月の海外旅行に行ってくる。」だと

「美麗。何を言っているんだ、明日から一週間だよ。」

「あらあら、そうだったかしら。」

首を傾げながら、頬をに手をやった。そういえば、もう一つ忘れていた。

母さんは重度の天然で、男殺しなんだ。色々と天然なせいで母さんに告白してくる男性が後を絶たないんだ。最近は減って来たよ週に五回に減ったよ、え?! 前はどのくらいだったかって、そりゃあ一日の平均が5回位だったよ。

父さんもその時の気苦労。見ていて可哀想だったよ、母さんはそんなのお構いなしだったからね。告白されたことをいつも家族全員がそろろつ夕食時に話していたんだよ。

本当に父さんを見ていて、可哀想だったよ。

「そんな事よりも、明日星香と一緒に此処に行ってください。」

そういつて、父さんにとあるテーマパークのペアチケットを受け取った。

「……はい?」

息がピッタリの俺と星香。

「そういう、事だから明日からよろしく。」

そういつて、父さんは母さんをお姫様だっこして二階の夫婦部屋に消えていった。残された俺と星香は呆然としていた。

「……」

すると、突然星香が俺の服の裾を掴んだ。うん、こういう小動物的な行動が可愛いんだよなコイツハもう。頬を緩みまくった。

「ユ一君。私は行ってみたいです。」

そういう風をお願いされると、断れるわけないじゃん。

「了解しました。お姫様。」

「本当ですか!?!」

急に顔を近づけて、嬉しそうに聞いてくる。星香の顔が目と鼻の先にある。

年頃の俺には……この距離はヤバイ……心臓が高鳴る。

「あつ! すいません!!」

顔を真っ赤にしながらバツと離れた。もうちょっと見ておきたかったなっていうのが俺の本心だ。心臓は爆発しそうな程、高鳴っている。







第五話 一馬(ユニコーン)の休日その1(後書き)

いやあ〜〜星香は可愛いですね。嫁に欲しいぐらいです。

## 第六話 一馬(ユニコーン)の休日その2(前書き)

更新です。

家を出るまでの、ちょっとした風景を書きました。

## 第六話 一馬（ユニコーン）の休日その2

とうとう、休日の土曜日。

珍しく目覚まし時計を使用して、6時前に起きた。もう父さんと母さんは荷造りをして、海外旅行に出かけていて、家には居ない。

うん、今日一日は平和に過ごせそうだ。ガチでお願いしますよ、神様。こんなに運に見放された俺にも、今日ぐらいは平和に過ごさせてください。

初めて、朝日の出に向かって座禅を組んで、合掌したよ。効果があるといいな……無かったら、星香が可哀想だ。

自分の部屋から出て、リビングのドアを開けようとした時、中からジューってという音が聞こえた。

「星香なのか？」

星香にはれない様に小声で呟いた。という事は星香が料理をしている事なのか？ アイツ料理できるのか？ 毎回手伝ってもらっているけど、手伝いと料理をするっているのは思っているより全然違うものだからな。特に調味料の量とか、味付けの感覚とか、手伝いだけじゃ分かりづらいからな。

まあ、大丈夫だろう。母さんみたいにタワシをウニと間違えたりしないよな。

俺はアイツの事信用しているからな、邪魔しちや悪し……なら、もう少し寝るか。後、小一時間ほど寝るかな。

物音を立てないように自室に戻って、俺はムラムラしていた。

よく、考えたら今から一週間星香と一つ屋根のしたで二人つきりで過ごす事になるじゃん。ヤバイじゃん、俺の理性保かな。無理そうなのがするが、頑張ってみますか。星香を襲って、嫌われたくないし。何をとっても、星香を傷つけたくないのが一番だしな。

そして、もう一度俺は眠りについた。

「ユー君。起きてください。」

「お願いですから、ユー君。起きてください。」

ユツサユツサつと揺らされる。ああ、何か気分が良い。気持ち良い。

「でないと、」

でないと何だね星香？

「辞書の角の錆びにしますよ。」

「起きます。起きさせていただきます。」

ベッドからジャンピングして、飛び起きる。辞書の角攻撃はマジで洒落にならんからな。昇天してしまうわ、俺Mじゃないから攻められると弱いのだ。

「早く、着替えて顔を洗って、歯磨いてくださいな。」

「へいへい。」

そういつて、俺の部屋から出ていく星香。

「何かさ、新妻化してきてないか？俺の気のせいだと良いんだが……それとも、何だろうな？」

タンスからジーパンと白のちよつとした柄の入った服を取り出して、着替えた。寝間着を持って部屋を出て洗濯機に叩きこんだ。

中に星香の下着も入っていた。うん、良いものだな。

無意識に俺は握っていた　　星香のパンツとブラジャーを、しかも俺は、それをクンカクンカしていた。故に俺は気づけなかった。

「ゆ、ゆつゆゆゆゆっゆー！　ユ一君、何をしていますか！  
?!」

俺の変態行為を見られていることに、

「ハッ!？」

俺は今何をしていたんだ。それにこの生温かくて良い香りを出している物はなんだ？ 顔に張り付いている布を手を持って確認した。

……俺ってばヤラカシタ……アハハハハ。ヤッバーイ!!

「アノ星香サン、コレハデスネ。魔ガサシタトイウカ、ナントイウカ。」

「ユー君。」

メツチャ怖いです。ハイ。

「ゴメンナサイ。」

その場でジャンピング土下座。膝が割れるかと思った。膝すんごく痛かった。

殴られる覚悟であつたが、殴ってくる気配が全く見られない。はて、どういふ事だ？ 顔を上げて見ると、顔を真っ赤にしている星香の顔を見た。

あつれく俺が思っていた展開と全く違うのですが、どういふ事なんでしょうか？

「言ってくれば、脱ぎたての下着を渡していたのに。」

星香は何を言っているんだ？ ぶつぶつといった感じで何を言っ

いるのか聞き取れないんだが。

俺が不思議そうな表情をしていると、プイって顔を明後日方向に向けた。

「何でもありません。それに、早くしてください。」

「あ、ああ。」

立ち上がった。膝がヒリヒリして痛い。

リビングの椅子に着いて、星香の用意してくれた朝食を食べた。メニューは日本人の代表的な朝食、みそ汁と白米。特にみそ汁は文句なしにうまかった。

食器を洗い片づけて、一旦自分の部屋に戻り身だしなみやその他諸々の準備を完了させた後、戸締りを確認した。

「星香、裏手のドアは閉まっているか？」

「ハイ、今閉めてきたので大丈夫ですよ。ユ一君の方こそ、大丈夫ですか？」

一応確認したが、問題なし。

「俺の方は問題なしだ。」

俺の言葉を聞いた星香は早歩きで俺の傍までやって来た。

「じゃあ、早く行きましょう。」

俺の腕を引っ張る星香は、良い笑顔をしていた。



第六話 一馬(ユニコーン)の休日その2(後書き)

次回、遊園地。

日曜日に更新できたらいいな。次回は何時もより多めにする予定です。

**第七話 一馬(ユニコーン)の休日その3 (前書き)**

活動報告通りに、土曜日に更新しました。

休日はその5まで書く予定です。

## 第七話 一馬(ユニコーン)の休日その3

家を出て、10m位歩いた所にバス停があるので、そこまで歩いた。

ここで俺の服装をご紹介しよう。

柄物のTシャツに黒色の上着に、ちょっとしたアクセントにネックレスとブレスレットをしている。ズボンは紺色のジーパンだ。それと、何時もは地味な黒色の眼鏡をかけているが、今日は柄の入ったオシャレな眼鏡をかけているよ。言っておくけどこの眼鏡伊達じゃないよ、きちんと度が入っているよ。自慢じゃないが俺ってそんなに視力良くないからな。

財布はシーパンの後ろポケットにいれてある。

今日のために貯金箱から、5万円ほど取り出してきた。平凡な中二にとっては結構な出費だと思う。でも、他の最近の中学生はリッチだからお財布事情はそこまで分らん。特にバーニングとかすずかとかな……金持ち爆発しろ!!!!!!

そんな俺よりも、星香の方が気になるだろう。正直に言っただけで萌えだし、メツチャクチャ可愛い。

こんな可愛い子が嫁だったら、幸せな家庭を築くことが出来そうだ。

星香は、ゴチャゴチャと飾らずに結構シンプルに決めていた。

細身のパンツに、小花柄のワンピースを重ねていた。当然ワンピースの色は白。

片手には大き過ぎず、小さ過ぎないバックを持っていた。何時もは髪型をサイドポニーにしているのだが、今日は髪をおろしていた。

うん、凄く似合っている。それと、同時に俺と星香が一緒に歩いていて、俺は見劣りしていないだろうか？　それが少し心配した。星香と一緒に掛けるから、結構身だしなみには時間をかけたんだよな。まあ、それは二の次だな。

なんたって今日の一番の目的は……

「星香、今日は楽しめよ。」

「はいっ！！！」

元氣百倍の返事。これなら、突然現れたアソパソマソに襲われても大丈夫だな。

そう星香が楽しんでくれることが一番なんだからな。バスに乗り、二人掛けの座席に座った。約十分間バスに揺られること、目的の駅に着いた。

貰ったチケットの遊園地の場所が、隣街。ここ海鳴市より少し大きな街だ。

それで、その場所はやての住んでいる街でもある。よくよく考えてみると、はやてって海鳴市の隣街に住んでいるんだよな。

絶対に見つかりませんように……こういう時に限って見つかる可能性が大きんだよな……特に俺の場合は……何も無いと良いけどな。見つかったら「不幸だあああああああ……！！！！」て喉がつぶれるぐらいの大声で叫んでやる。

だから、今回だけは大っ嫌いな神様に神頼みしてやるから、叶えろよ。俺の願いを……なのは達に遭遇しないっていう願いを……もし、見つかったら、俺は修羅になって神様という名のクソジジイをぶっ殺してやるからな覚悟しておけよ。

電車に乗って、また揺られる事30分弱。目的の駅に着いた。

早く着いてほしくて堪らないのか、星香がダツシユで電車から降りた。その際に、入ってくる人とぶつかりそうになった。星香はすぐに「すみません。」と頭を下げた。

「ユ一君。早く来てください。」

「急がなくても、バスの時間には間に合うよ。」

「それでもです。」

「はいはい。」

駅前のバスに乗って、遊園地前のバス亭で降りる予定だ。改札口を抜けて、そのバス停の所まで行った。

うん、ヤッパリ列が出来ていた。その中でも若いカップルが多いな。特に16才〜20才位までのカップルが多く並んでいた。

当然、中には家族連れの人たちも居た。

その中に俺たちも並んでいる。位置的にいうと、列の半分から前位の位置に居る。確実に座れる位置だ、電車の時は座ることが出来ずに立っていたからな。

「ユ一君。今日は楽しみましょうね。」

「当たり前だろう。楽しまないと損だしな。」

俺と星香は一緒の事を考えて居たらしく、一緒にクスクスと笑いあった。

流石にこんなに人が行き交うところでは大笑いはしたくは無いし、恥ずかしいからだ。それは星香も同じだろうな。

それにしても、星香の笑った時の笑顔は可愛い。星香が笑った時に結構な数の男が星香を見て、顔を赤くしていやがった。ふふん、良いだろう。

今から星香と一緒に二人だけで、遊園地を回るんだ。俺は勝手に優越感に浸っていた。

そういう俺も、星香の笑顔にやられて真っ赤にしていたのは秘密だぞ。分ったな。

でもさ、そう考えるとな。高町達も可愛いし綺麗なんだよな、バーニングもそうだけど。

偶に思うんだ、俺の周り可愛くて綺麗な女子多くないかってな。今、こんな思考を巡らせるのはあまり良くないし不謹慎かもしれんが、つくづくそう思ってしまうんだよな。

「イタッ」

太ももに鋭い痛みが走った。星香が俺の太腿を抓っていた。

「今、何を考えていたのですか？」

しまったな。俺の思考が表情に出っていたか、仕方ないこうなったら。

「まあ、星香の事を考えて居たよ。」

耳元でボソツと呟いた。流石にこんなセリフを一般人に聞かせたく無い。俺が恥ずかしい。

当然だが、星香は、

「ハウ」

顔を真っ赤にしていた。星香もやっぱり場所を弁えている。こんな所では叫んだりほしないが、誰が見ても分かるほどに顔を真っ赤にして俯けていた。

何時もクールビューティーの星香が、こういう風に感情を出すだけでギャップがあって萌える。

バスがやってきた。何時までも顔を真っ赤にして俯いている星香の手首をつかんで、引っ張っていく。

「何時までも、ポーっとしてたら迷惑だろう。」

「あ、そうでした。すいません。」

星香は後ろの方を向いて、頭を下げた。誰も星香に文句を言った

りせずに、気にしないで良いよってみたいな感じで対応してくれた。何度も思っけど、ここ等辺に住んでる人達って良い人多過ぎ。

バスに乗って、二人掛けの座席に座った。

俺はずっと、星香の横顔を見ていた。だって、見ていて飽きないんだよ。

さっきから星香の表情が変わっていつているんだ。それが、徐々に遊園地に近づくにつれて、頬を緩んで行っている。更に視線をあつちにキヨロキヨロ、こつちにキヨロキヨロさせていた。何なのこの可愛い小動物は！！！ 俺を萌え殺す気ですか？！

星香の嬉しい時の色々な表情を見ることが俺得。

バスに揺られて約10分。遊園地前に着いて、俺ら二人は金を払って降りた。もちろんお金は俺持ちだよ。

星香の方に視線を移すと、まあそこには予想通りの満面の笑みの星香が居た。

「星香。」

「何でしようかユー君！！！」

嬉しい気持ちを全く抑えきれない様子だ。Thank you.



my 両親。星香はさつきからずっと良い笑顔をしていますよ。

「good job!!!」

父さんと母さんが居るであろう、方向に腕を伸ばして中指を立てた。マジでgood jobだ。

すると、突然。腕をグワッと引っ張られた。一瞬、肩が脱臼するかと思ったぞ今の勢いは……星香が俺の右手を両手で持って、引っ張っていた。

「早く。早く行きましょうユー君。」

そんな純真無垢な瞳で見つめないでくれ、俺には眩しすぎる。俺の両目が某ムスカ大佐みたいに「目が、目があああああ!!!」てなってしまうぞ。それでも良いのか？

「そんな、急がなくても遊園地は逃げたりしないよ。」

「それでもです。早く早く!!!」

「ハイハイ。」

息子、娘に急かされるパパの気持ちってこんな感じ何か？何か凄く嬉しい？表現が難しいが、多分嬉しいっていう表現が一番近いだろう。

俺は星香のダッシュに引っ張られてた。フリーパス付のペアチケットを入場門の係員に渡して、遊園地に入ったその瞬間。

「ワァーーーー！！！！」

星香が両手を広げて感嘆していた。ここの遊園地はな、最近できたばかりで、しかも敷地面が某ねずみランドに匹敵するぐらいの広さなんだ。

うん、アホみたいに広いな。これじゃあ、完全制覇できそうにないな。まあ、今日の趣旨は　　思いっきり楽しむことだ。

さあ、今日は思いっきり楽しむぞ。

第七話 一馬(ユニコーン)の休日その3 (後書き)

次回は遊園地編です。

第八話 一馬(ユニコーン)の休日その4 (前書き)

更新です

## 第八話 一馬（ユニコーン）の休日その4

星香は早速、パンフレットを広げている。最初はどれに乗ろうか吟味をしているようだ。

目が物凄く真剣。少し近寄りがたい雰囲気を出している。

星香、お前どんだけ真剣なんだよ。もうちょっと楽にしるよ、じゃないと肩が凝るぞ。

気が付けば、俺は額に手を当てていた。仕方ねえな。

「星香、行くぞ。」

「え、あ！ ちょっと!?!」

星香の手首を握って、歩き出す。

「星香、こつこつのは直感だ。アトラクションの名前でも何でもいい。これだって思ったものに乗ればいいんだ。分かったな。」

コクコクつと頭を縦に振った。

「よし、行くぞ。」

「お、おおお」

今日の星香はノリが良い。いつもこんな事してくれないのに……まあ、いつも通りの星香が一番いいけどね。

「ユー君。私はあれが乗りたいです。」

「マジで言ってるのか。」

「はい。大マジです。」

「OK。やってやるうじゃねか。」

そういつて係員に眼鏡を渡して乗り込んだのは、このテーマパークの一番の絶叫マシーン。その名も「dead or alive」  
「生きるか死ぬかだ。」

早速、先頭に乗った。こうなったら自棄だ！！ きやがれ！！  
…正直言いますと俺、絶叫系は全くダメなんだよね。生きて居れるかな俺。

隣の星香の顔を見てみると、うん、笑顔で何よりだ。俺も男だ、星香の為に命を賭けるか。只の絶叫マシーン如きだがな

アハハハハハハ。オレシンダ。

「ユー君、楽しましましょうね。私すごく楽しみです、良くテーマパークのCMが流れた時にこういう絶叫マシーンに一番に乗って見たかったんです。」



すると、突然。左手に人肌の温もりを感じた。

「ユー君。大丈夫ですよ。私が手を握ってあげますから。」

「せ、星香。」

あんた、男前やあああああ！！俺よりも男前じゃん。こんなに良い子、なかなか世の中に居らんよ。

手足の震えが止まっていた。

「ね。」

マジで良い子やあああああああああ！！！！！！世界の中心で叫びたい。

突然。ガシャンっという音を立ててコースターが止まった。はて、なんで止まったんだ。まだ、100m位しか登っていないのにな。乗っている人たちがガヤガヤし始めた。

『うおおー！！』

と男達は野太い声を上げた。

『キヤアア！！』

と女性たちは短い悲鳴を上げた。誰もいきなりのトップスピードに何も心構えも出来ていなかった。



トップスピードで駆け上がるコースター。  
さあ、来るならきやがれってんだ。

眺めが、アホみたいに良いなあ。あ、死んだ曾おじいちゃん今からそっちに行くよ。

曾おじいちゃんがこっちへおいでって、手を振っているのが分かる。

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！  
！！！！！！！！』

地を砕き、天を裂くような悲鳴が響き渡った。其処からの記憶が全く無い。多分、俺の危険防衛能力が発揮して強制気絶させたんだろう。最後がどうなったか記憶が全く無い。

気づいたら、「dead or alive」の前にあるベンチに座っていた。俺の隣には星香が居た。

他のベンチにも、「dead or alive」で見かけた人たちがたくさん居た。多分全員が、同じ目にあっただろうな。もう、絶対にあれには乗らないぞ。

「星香。大丈夫か？」

「え、ええ。何とか大丈夫です。」

言葉はちゃんと出していて、しっかりしているな。

「よし、次に行くぞ。」

「行きましょう。次は落ち着いたのが良いです。」

「俺もだ。」

重たい腰を持ち上げて立ち上がった。そして、歩き出す。

俺は常に、星香の歩幅に合わせて歩いている。これぞ、紳士の嗜みだ。

「次はあれが良いです。」

そういつて、星香が指差したのは、定番中の定番。お化け屋敷だ。

「い、良いぞ。お、おばけなんて、こここの世に、いい、い居るわけ、ななないないないからね。」

「や、止めましょうか？」

「いや、ただ大丈夫だあああ。」

「そうですか。では、」

また、右手に温もりを感じた。

「私が、手を繋いであげます。」

顔を赤くして、恥ずかしながらも言うてくれた。そんな事されたら、

逝くしかねえじゃんか。

「よし、逝くぞ。」

「はい、字は違う気がしますが、逝きましよう。」

そうだね、星香の方も字が違うね。後ね、星香が俺の手を握った時に気が付いたんだけどね、星香の手も震えていたんだ。ここで漢をみせなけりゃあ漢じゃねえな。なあ、一馬よ。<sup>ニコヨン</sup>

作りはメツチャ雰囲気が出ている。建物は元からあつた廃病院を使っているらしい。

正直に言おう、ちびってしまいそうです。俺、霊的なもの一切ダメなんです。

マジで、でそんな雰囲気があるんですが……ていうか、マジで出るんじゃないか？ 特に深夜とか……ていえるほどのマジでヤバそうなお化け屋敷です。

「い、逝くぞ。星香。」

「は、はい。」

二人して、声が震えていた。さあ、逝つてきます。

「お二人ですね。では、どうぞ。」

係員にパスを見せて、暖簾を潜った。

もう、そこから先は思い出したくない。二人して、『ぎゃあああああああああああああ！！！！！』てガンガンに叫びまくった。

怖すぎて、マジで脱糞しそうになりましたよ。割とガチで……そんな事は命に代えてもしないけどな。

何なのあれ、地を這うゾンビ。空から降ってくるゾンビ。外の窓から入ってくるゾンビ。地面から手を突きだすゾンビ。

ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビだらけで、頭が可笑しくなりそうだった。

一番のインパクトは、ゾンビが壁をぶち破って、そこから全力ダッシュして追いかけられたときは、マジで俺ら二人も全力ダッシュで逃げた。

もう嫌だ。

もう、お化け屋敷なんて入らないぞ。よくギャルゲーの主人公とヒロインがお化け屋敷に入って、主人公は良い思いをするけどな。このお化け屋敷はそんなレベルじゃない。

下手すりゃあ、トラウマレベルだ。それほど完成度が高くて、滅茶苦茶怖いお化け屋敷だった。

「せ、星香。だ、だだいじょうぶか？」

「お化け怖い。お化け怖い。お化け怖い。」

ヤバイな、変な意味でトリップしてやがる。困ったぞ。

「こっぴなったら。」

パンっ！！ という手と手を打ち合わせた音が響いた。ようは星香の目の前で思いっきり両手を叩いたんだ。

「はっ！」

よし、正気に戻った。

「大丈夫か？」

「私は、一体？ 思い出そうとすると、頭が痛むんですが？」

完全にトラウマになってるね。

「大丈夫だよ星香。何も無かったよ。そう、何も。」

「そ、そうですか。ユ一君がそういうなら信じます。」

「それにしても、腹減ったな。」

時間を確認してみると、昼丁度の時間帯だった。

「そうですね。なら、あそこのベンチに座ってランチにしましょう。今日は頑張ってお弁当を作ってきました。」

そういつて、バックを掲げる。

すぐ傍にあったベンチに腰をかける。星香は中から四段ぐらいになっている弁当箱を取り出して、箸と布巾を取り出した。

「あれ？」

「どうした、星香？」

「飲み物を忘れてしまったようです。」

「そうか……よし、俺が買って来よう。」

「お願いしますね。ユ一君。私は麦茶をお願いします。」

「了解。」

俺はベンチから腰を上げて、早歩きで自動販売機を探しに行った。さあ、急ぐぞ。こういう時に展開に限って、戻って来た時に星香が誰かに絡まれている可能性は99%位ありそうなんだよな。特に、星香がメツチャ可愛いのが一番の理由だろうな。

ベンチから100m位離れた所に自販機があった。思っていたより遠くにあったな。

500円玉を入れて、麦茶と緑茶を買った。そして、ダッシュ。

「放してください。」

「良いじゃんかよ。一緒に遊ぼうぜ。」

「遠慮します。連れが居ますので。」

「そんな奴と遊ぶより、俺らと遊んだ方が楽しいよ。」

やっぱり、当然の如く。ベタなガラの悪いチャラ悪に絡まれていた星香。

人数は二人。

俺は重い足取りで近づいていく。

「おい、何勝手に人の連れに手を出してんだ。」

チャラ男その1の肩に手を置く。

「ああん、何だてめえ、は……」

「デカ!!」

語尾が小さくなっていく。それもその筈、一応俺の身長は14歳で  
ありながら180cm超えているんだ。

それに比べて、チャラ男その1とその2の身長は170cmあるか、  
無いかだ。

「おい、何人の連れに手を出してんだって聞いてんだよ!! 聞こえてねえのか?」

自分なりに結構ドスの効いた声で言ってみた。

するとどうだ、チャラ男その1とその2は『ひいひいひいひい!!』  
て言いながら逃げに行った。

良かった殴り合いにならなくて。俺喧嘩なんてやったことないし、  
痛い嫌いだから。

その証拠に、俺の脚が微妙に震えていたんだ。この事は内密にお願い  
しますね。

「星香、何もされてないか？」

「はい、大丈夫です。ユ一君が助けてくれたおかげです。」

頬を緩ませている星香。なぜ？

「星香が無事なら良かった。それにほら、コレ。」

星香に麦茶を渡す。

「ユ一君。ありがとうございます。」

「じゃあ、食べようぜ。星香のお弁当。」

「はい。」

『いただきます。』

ジューシーな唐揚げに、トロっとした卵焼き。サクサク衣のエビフライに色々な具があったオムスビ。ポテトサラダと色々な食べ物があつた。

どれも、文句なしにすごく美味しかった。

最高に美味いよ星香。

食べ終わり、遊園地も後半戦に移る。



第八話 一馬(ユニコーン)の休日その4 (後書き)

次回、遊園地編後半です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3482z/>

---

魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

2011年12月18日00時52分発行